塾生になり、Pinang 島[4]まででではあったが Raden Said はメッカに向けて出発した。そこで彼は Syaikh Sayid Maulana Mahribi と遭ったのだった。Wali Songo によって建てられた Demak のモスクを一緒に建てるために彼はジャワに戻らされた。Juwana[5]まで来ると船は動かなくなった。Raden Said の祈りのゆえに船は動きだし東風に乗って Cirebon に向かった。Cirebon で彼は下船し、船から降りて水の上を進んだ。船員たちは全員驚き、船主は懺悔して部下となった。Raden Said は Kalijaga に行き、続いて Maulana Ibrahim が修行している Gunung Jati のある Kuningan に向かった。Raden Said は Syaikh Maulana Ibrahim の婿として取り上げられ Cirebon に戻った。Raden Said は Sunan Kalijaga として知られている。

Brawijaya 王は梅毒にかかっていた。これを治療する唯一の方法は Wandan[6]の女性と肉体関係を持つ事だった。肌の白い女性、病気の治療薬となるチャンパ妃の侍女であった。Wandan の女性は妊娠していたものの農園主に受け入れてもらった。彼女はその後 Raden Bontan Kejawan を生んだ。Raden Bontan Kejawan はマジャパヒトに行った。<52>Raden Bontan Kejawan はチャンパ人の Bende Sekar Dalima を殴った。彼は捕まり王に会わされた。Raden Bontan は王自身の子であることがはっきりした。それ故、処罰され、2 本のクリスを褒美として得た。Raden Bontan Kejawan は必要な教育を与えてもらうために Kyai Tarub に預けられた。

Demak モスクの建設が始まった。Wali Songo の Sunan Giri, Sunan Cireon, Sunan Gesang, Sunan Majagung, Syaikh Lemah Abang, Sunan Undung, Sunan Bonang, Sunan Derajat, Sunan Kalijaga もこの建設事業に参画した。Demak は既に強国となっていた。Demak の人たちはマジャパヒトを攻める準備を進めた。Brawijaya 王は一度として Demak のイスラム教徒たちを妨害したことがなかったので Sunan Kalijaga はこの目的を中止するように忠告した。とはいえ、この忠告は無視された。全員がマジャパヒトに反旗を翻すかたい決心をしていた。Sunan Kudus が軍を率いる使命を帯びた。とはいえ、モスクの建設は続けられていた。Sunan Kalijaga は最終的にモスクの方角を決定する柱の建設を担当した。このモスクの最後の柱は集成材で作られており、それゆえ Saka Tal と呼ばれている。キブラは左手にカーバは右手にあった。Sunan

[4] (訳) ペナン島。当時の港町)
[5] (訳) Kudus と Rembang の間)
[6] (訳)万丹郷という名の町は台湾の高雄市にある

Kalijaga は、ヤギの皮に包まれて天から落ちてきた服 Antrakusuma を褒美として得た。Sunan Undung 別名 Sunan Kudus は戦闘中に着用するために Antrakusuma を借りた。モスクの建設は 1329 年に終了した。Sunan Giri は持ち上げられてイスラム法学者になり、残りの 8 人の sunan たちはイスラム説教師になった。Sunan Kudus の息子の Raden Iman は下級官吏でモスクの守衛、世話役、奉仕人になった。

多数の太守たちがイスラムへ改宗した。マジャパヒトの Brawijaya 王と Kelungkung の太守だけがイスラム入信するのを拒んでいた。Bintara 太守には三人の子供がいた。本妻(Sunan Giri の娘)は Raden Surya と Raden Trenggana を生み、Randu Sanga 出身の二番目の妻は Raden Kanuruwan を生んだ。三番目の妻とのあいだに Raden Patah は Raden Kikin と Ratu Mas Nyawa を得た。川の東側に住んでいた Raden Surya は Raden Gugur の娘である Retna Lembah と結婚した。<53>Raden Trengganana は Palembang 出身の Arya Damar の娘と結婚し、Ratu Mas Nyawa は Madura 出身の Lembu Peteng の息子である Raden Sampang と結婚し、Raden Kikin は Jaran Panolih の子である Sumenap 出身の人と結婚した。Bintara 太守は Brawijaya 王に忠誠であり、すでに決められた日にちに反対していた。Raden Patah の部下は日増しに増えた。その最後に Demak の人たちは反乱を起こした。Sunan 全員が彼らの息子たちを戦場に送った。Sunan たちの間で戦争に加わったのは Sunan Kudus だけであった。マジャパヒト軍は Gajah Mada、Terung 太守、Pengging の Jayaningrat に率いられていた。Syaikh Lemah Abang 師を怖がったため太守 Jayaningrat の息子の Kebo Kenanga は敵側に寝返ったが、Kebo Kanigara は Brawijaya 王にそのまま忠実であった。Raden Imam は Demak の軍勢を率いていた。Sunan Giri は Raden Imam に「真実のクリス」を譲渡し、一方 Sunan Cireon は胸飾りを譲った。抜き放つと真実のクリスは強風や大雨を起こしネズミを出した。Raden Imam は敵の目には一万人に見える千人と共に活動した。胸飾りから出たネズミはマジャパヒト軍の糧食を食べつくした。大雨と強風はたくさんの破壊を伴いさらに移動する蜂は恐怖を起こした。敵はマジャパヒトまで退却した。Terung 太守は既にイスラムに改宗していたので、彼の家だけは破壊を逃れた。Brawijaya 王は Sengguruh に一握りの家族と Gajah Mada 宰相とともに避難した。この事件は 1399 年に起きた。Bintara 太守は昇進し Panembahan Jimbun になった。Penembahan Jimbun の部下と親類たちの地位は上がった。後日彼らは Sengguruh の

Brawijaya 王の運命について話し合った。最終的にBrawijaya 王に改宗する機会が与えられた。この目的のためにLembu Peteng とJaran Panolih が Sengguruh に送られたが、Brawijaya 王は改宗を拒否したままであった。やむを得ず Sengguruh は攻撃されたが、Brawijaya 王は部下ともに Bali 島へ逃げおおせた。<54>Sengguruh が陥落したのは 1400 年、符牒では sirna-ilang kertining-bumi であった。

第三節　Semarang の三保洞(Sam Po Kong)廟の資料

スマランの三保洞廟で収集された資料は、特に今に至るまで解明されていないマジャパヒトの衰亡期に関する歴史を書く上で極めて重要であったが、1964 年になるまで歴史家の間では知られていなかった。スマランの三保洞廟の資料は Ir. M.O. Parlindungan によって、著書 Tuanku Rao の添付 31 のページ 650-672 にある「ジャワ島におけるイスラム発展時期のハナフィー派イスラム教徒華人の役割」という題で公開された。この Ir. Mangaraja Onggang Parlindungan は私の先生であったのでよく知っている。Residen Poortman の詳細研究結果から引用したスマランの三保洞廟からの史料データに関してより詳しく話を聞くために同先生の家でお会いしたいと思っていた。Tuanku Rao の本で解説されているように、Residen Poortman は 1928 年にオランダ植民地政府から、Raden Patah は華人であったというのが事実であるかどうかを調査するよう命を受けた。Residen Poortman は、Jin Bun が雲南方言(語)で強者を意味することを知っていた。しかし、Jin Bun の名は明の系列からの中国語史料には盛り込まれていなかった。Residen Poortman は 1928 年にスマランに向かった。その時、スマランでは共産党の暴動が燃え盛っていた。そのためこれは最良の機会であった。スマランの三保洞廟を家宅捜索する理由になった。警察の援護を得て彼は三保洞廟の家宅捜索を行い、牛車三台分にもなる中国語で書かれた資料を廟から押収した。三保洞廟からの中国語で書かれたこの資料は Panembahan Jin Bun、別名 Raden Patah に関する詳細研究の材料となった。Raden Patah は Serat Kanda の中では Panembahan Jimbun、Babad Tanah Jawi の中では Senapati Jimbun と照合することは既に明白である。<55>この名は雲南語で「強者」を意味する Jin Bun に由来するものであることは明白である。この中国語書籍には 400 年以上前のものもあった。この Residen Poortman の調査結果は彼の個人的な依頼でオランダ政府によって秘密に

され、ジャワ島の治安安定のため特定の高級官僚が事務所で利用できるだけにとどめられた。この調査結果が広く国民の間に知られるとジャワ島内のイスラム社会に動揺が生じることは極めて明白であった。政治のみならず宗教的な偉人が華僑たちの間から出たことで、華人社会で尊大な感情が生まるからであったろう。

Residen Poortman の Panembahan Jimbun に関する調査結果はオランダ政府に対するプレゼンテーション(prae-advies)の中の序文に盛り込まれている。1928 年に Poortman はバタビアの Acting Adviseur Voor Inlandsche Zaken Van Het Binnenlandsh Bestuur (ジャカルタの国内政治へのアドバイザー)になった。彼は要職にあった。オランダ政府に対するプレゼンテーションには GZG, Geheim Zeer Geheim, 極秘の印が押され、さらには uitsluitend voor Dienstgebruik ten Kantore(帯出厳禁)というメモもつけられた。このように Poortman のプレゼンテーションは限られた高級官吏のみ事務所で読むことができただけであった。他の人たちは読むことができなかった。このプレゼンテーションはまず総督の Colijm に提出され、コピーは Den Haag の Rijswijk の国立文書館にある。このプレゼンテーションは印刷物の形態をとってはいるものの番号が振られた 5 部しかない。本来ならこのプレゼンテーションはジャカルタでも見られなくてはならなのだが、実際にはジャカルタには存在しない。独立宮殿内にはその古いものも存在しない。文書室は壊され、スカルノの食堂になってしまった。この独立宮殿に保存されていたコピーがどこに行ってしまったかは現在まで知られていない。ここで、独立宮殿はオランダのインド総督の公邸であった建物であることを解説しよう。〈56〉日本の占領時代には総督公邸は「Seiko Shikika=最高指揮官」の住居となった。日本が降伏してからは再び総督公邸になった。1950 年になって初めてこの建物はインドネシア共和国大統領公邸になったのである。

要約すると、Jin Bun に関して序文に盛り込まれていた Poortman のプレゼンテーションはインドネシアには存在しないが、オランダの Rijswijk の公文書館にはあるということになる。Poortman 自身も確かに一部は持っていたはずである。彼は Voorburg で 1951 年に死亡した。Poortman 所有の一冊は相続人の手に落ちたと思われる。Sutan Martuaraja の息子としての Ir. Mangaraja Onggang Parlindungan は Poortman にとても可愛がられた。彼が Delft の高等工業学校で勉強していた時に、彼は Rijswijk の公文書館でこのプレゼンテーションの序文を読む機会に恵まれた。その抜粋は今でも彼

の家に保存されている。私は、上記の序文に関して作成されたメモを見る光栄に浴した。この序文の抜粋はその後、Tuangku Rao の添付 31，650-672 ページに述べられている。この著述の中で私がまだ見ていないのは Poortman が作った時系列で並べられたマジャパヒト王の系譜であるが、これは Ir. Pralindungan のメモの中に既にある。

このマジャパヒト王の系譜はいまだその真偽が大変疑われるのではあるが、この系譜はマジャパヒト史を書く上で実際に重要な意味を有する。ナガラクレタガマやパララトン、マジャパヒト時代のいろいろな碑文を元にして、私はマジャパヒト王の系譜を作る努力をした。1478 年のマジャパヒト王国の衰退まではこの系譜を作成するに大した苦労はなかった。極めてこんがらかったマジャパヒト諸王の系譜に関するパララトンの記述を解説することができた。しかし、マジャパヒト王国の衰亡後についての開設には、1967 年までには私が発見できなかった新しい材料が必要であった。Poortman の序文で私が必要としていた情報を得たのであった。〈57〉

バタック語には高い能力がなかったが、residen Poortman は中国語には詳しかった。スマランの三保洞廟から押収した中国語の書籍を読んで自分自身でオランダ語に翻訳した。このスマランの三保洞廟から得たデータに基づき、Poortman は Jin Bun が Kertabhumi 王を捕えて Demak に連れてきた後、Jin Bun は Majapahit の支配人(pengusaha)として華人 Nyoo Lay Wa を任命した。しかしながら Nyoo の政権は元マジャパヒト人の好感を得ることができなかった。1485 年にはマジャパヒトのあちこちの地域で反中華暴動が勃発した。この暴動はジャワ/マジャパヒトの人たちの華人に対する復讐という印象を与えた。支配人 Nyoo はマジャパヒトの都で暗殺された。この後 Panembahan Jimbun は三保洞廟の記録によると Pa Bu Ta La と呼ばれる彼の姻戚を昇格させた。上に述べたように、Pa Bu Ta La とは prabu Girindrawardhana であり、Girindrawardhana はサカ歴 1408 年、西暦 1486 年に発出された Jiyu 碑文に掲載されている。この人の本名は Dyah Ranawijaya であった。

Residen Poortman は本物の重要な書類に基づく詳細研究に基づいているので、彼は自説の正しさに自信を持っていたのではあるが、まずは歴史上の人物に関する自説を述べるのには極めて慎重であった。歴史上の人物の特定において、彼は presumption(推定・仮定)あるいは hypothese(仮説)ではなく veronderstelling(仮定)あ

るいは supposition(推測・仮定)を用いその評価が最低の術語を常に使っていた。この二番目と三番目の術語はより高い評価を得てより強力である。veronderstelling(仮定)あるいは supposition(推測・仮定)という術語の使用は科学の分野においてその態度にいかに注意を払っていたかという態度を指し示している。

この序文の解説から Residen Poortman は Meinsma 出版の Babad Tanah Jawi を熟知していたことが明らかになる。スマランの三保洞廟の華人年代史に見られる歴史上の人物の名前は Dr. J. Brandes の出版した Babad Tanah Jawi とパララトンにあるものと注意深く比較された。この特定化の結果はすべて受け入れられるものではないが、その大部分はしごく当然であることは確かである。この件で、我々が意識しなくてはならないのは、特にマジャパヒトの「その後」の歴史と一般的にマジャパヒトの黄金期と衰亡期の歴史的知見は第二次世界大戦以前には深められていなかったことである。歴史家たちにとって未知で問題を起こさせる件がとてもたくさんあった。この三保洞廟からの華人の年代史を翻訳し読み解く作業で、Residen Poortman はマジャパヒトの「その後」の時代の歴史に関する新しい展望を作りあげ、歴史の闇を破ろうとしたのだった。この Babad Tanah Jawi と Serat Kanda の解説はたくさんのおとぎ話を含む物語のように聞こえる。ジャワ人自身、Serat Kanda と Babad Tanah Jawi のどこまで信じていいものかわからない。三保洞廟の華人年代史は Babad Tanah Jawi と Serat Kanda と比較検討が可能な新しい歴史資料であった。この史料のより深い研究が望まれる。

スマランの三保洞廟からの華人年代史は廟独自の年号を使用している。三保洞廟は永楽帝の治世 9 年 (イスラム歴 814 年、西暦 1411 年)に建立された。上記の華人年代史にあるすべての事件は廟独自の年号が記されている。これは碑文に一般的につかわれているサカ歴や西暦と合致させるのは困難ではない。これ自体では、時々問題にならない微小な差が出るだけである。

Residen Poortman は Arya Damar, Raden Patah 別名 Jin Bun と Raden Kusen は 50/50%混血で、華人女性から生まれたマジャパヒトの王の子孫であると言っている。華人からは仕事に熱心に粘り強く当たり、困難を恐れず仕事に飽きることがないという点を受け継いだ。父親側からはかれらは高貴で指導性を受け継いだ。〈59〉父母から受け継いだ上記の性格の組み合わせは、彼らの人生の発展に大きく寄与したので

あった。彼らは驚嘆に値する歴史上の人物であることは確かである。23 歳の時、Jin Bun は 184 年続いたマジャパヒトの壊滅に成功した。Kin San 別名 Raden Kusen は Jin Bun とほぼ同い年の時にマジャパヒトの宮廷にスパイとして潜り込み、内側からマジャパヒトの支配を蚕食することに成功した。その後、スマラン港を作り、マラッカを攻撃するた目に使用する巨大な大砲をうまく作り上げた。Arya Damar 別名 Swan Liong はスマランの武器専門家となり、その後中華商館長として Palembang に移動させられ、Palembang のマジャパヒト支配人も兼務した。

Demak サルタン時代に、ジャワの華人はほぼすべてが雲南と汕頭出身者の子孫であった。このことはその名の最初に付く名字からそれとわかるのである。名字の Ma と Bong は雲南人の名字であり、Gan は汕頭人の家族の名字である。このように、Ma Hong Fu, Ma Huan (馬歓), Bong Swi Ho は雲南の出身であり、Gan Eng Cu, Gan Eng Wan は汕頭の出身であることがわかる。ジャワ島の華人たちは現在ほぼ全員が福建出身の名字を有している。福建人の名字は Tan, Liem, Uy, Cia などがある。これは Demak サルタン国が衰亡した後、ジャワ島内では雲南系華人が福建系華人に圧迫されたことを意味している。

Ir. M.O. Parlindungan が著書 Tuanku Rao の添付 31 引用することと、このマジャパヒト史を書く上で必要な事項に関して問い合わせができたとともに上記の著書を利用させてもらうのを許可してくれたことは私にとって大きな利点となったと感じる。当然の事、この大変好意的な行為に私は謝意と共に賞賛を送るものである。〈60〉この本の序文中で、マジャパヒトの「その後」の歴史の闇を照らすことにより Residen Poortman と Ir. Parlindungan は大変価値のある貢献をしてくれたということを再度申し上げておきたい。

Spoortman はオランダ植民地時代の地方行政官のひとりであった。かれは Delft でインド学の教育を受けた。インド学の意図するところは、インドネシアに赴任するオランダ国の地方行政官候補が持っていなくてはならない植民地時代にはオランダ領東インドと呼ばれていたインドネシアに関する知識のことであった。インド学の知識は絶対条件になっていた。一般的なインドネシアに関する深い知識と、職責となる支配地域の現況についての深い知識のみで、植民地の地方行政官として職責を全うすることができたのだった。この条件は行政を成功させるために独立戦争の時代の指導者

たちも満たしたものであった。オランダ植民地政府は地方行政官をでたらめに配置したわけではなかった。これこそがオランダ政府が何十年にもわたってインドネシアを支配できたことの原因である。

Residen Poortman の個人の歴史には Ir. Pralindungan が添付-12 に省略して記載してある。知りたい人は誰でも上記の添付を読むことができる。この個人の歴史はマジャパヒト史を書くうえで直接関係しないので、大変興味をそそられるのだが Residen Poortman の個人史についてはここでは解説しないことにする。マジャパヒト史を書くうえで大切なのはオランダ政府に対する紹介文(preambule)の序文に盛り込まれた Jin Bun に関する研究成果である。その概要は Tuank Rao の添付 -31 の 650-672 ページに盛り込まれている。ここで引用するのは重要と思われるその一部分だけである。<61>ここで引用しない歴史上の人物を特定する上での推測は第三章で検討することにする。

第四節 紹介文(preambule)の序文概略

1405-1425 年

鄭和に率いられた中国の明の艦隊が南海(東南アジア)の海域と沿岸を抑えた。

1407 年

ながらく福建出身の非イスラムの華人たちの海賊の巣になっていた旧港 Kukang (Palembang)を中国の艦隊が攻撃した。旧港の海賊の頭 Cen Cu Yi (陳祖義)が捕虜にされ鎖につながれて北京に送られた。ここで彼は全南海の福建人に対する見せしめとして公開斬首刑に処せられた。旧港ではインドネシア諸島における最初のハナフィー派の華人ムスリム社会が構築された。この年にカリマンタンの Sambas でハナフィー派の華人ムスリム社会も構築された。

1413 年

明王朝の艦隊が艦船修理のため一か月にわたりスマランに停泊した。Sam Po Bo (三保馬=鄭和)、Ma Huan(馬歡)と Fe Tsin(費信)が礼拝のため華人ハナフィー派のモ

スクをしばしば訪れた。

1419 年

鄭和は南海沿岸全域で最大で発展途上にあるハナフィー派の華人社会の長とすべくチャンパの Bong Tak Keng をその地位につけた Bong Tak Keng はフィリピンのマニラに Gan Eng Cu を置いた。〈62〉

1423 年

Gan Eng Cu は、ジャワ島と旧港、Sambas を含む東南アジア南部で発展中のハナフィー派の華人ムスリム社会の長とされるべく Bon Tak Keng によりマニラからジャワの Tuban に移動された。その権威は落ちてはいたものの、いまだ支配していたマジャパヒト王国に対抗して、Gan Eng Cu は Tuban の華人ムスリムの長のような者になった。しかしながら、明王朝の艦隊が南海全海域を制覇したため、Gan Eng Cu は事実上 Tuban 港からマジャパヒトの宮廷を運営することになった。Gan Eng Cu はマジャパヒト王から A Lu Ya と称号する栄誉を賜った。その称号を与えたのは 1427 年から 1447 年の間治世を敷いたマジャパヒトの Su King Ta であった。

1424-1449 年

Ma Hong Fu はマジャパヒト王国の都での中国大使として配置された、Ma Hong Fu は Bong Tak Keng の娘婿であった。マジャパヒトの都への途上、Ma Hong Fu は移動大使として三回マジャパヒトの王宮を訪ねたたことのある費信に案内された。

1425-1431 年

鄭和提督は南京の知事に昇格し、事実上南洋を含む中国南部の代理王になった。スマランのハナフィー派華人のモスクで、鄭和提督の安全祈願に関して祈祷が行われた。

1430 年

鄭和提督自身が東ジャワの Tu Ma Pan 地域を奪い Su King Ta 王にその地域は降伏した。Gan Eng Cu の兄弟の Gan Eng Wan が マジャパヒトの属国の Tu Ma Pan の太守(bupati)になった。彼こそがイスラム教徒の中ではマジャパヒト王国で最初に太

守になった人である。〈63〉

1431 年

鄭和提督死去。スマランのハナフィー派華人ムスリムたちは葬送の祈りをささげた。

1436 年

Gan Eng Cu が Yang Yu 帝[7]に謁見するために中国に帰国した。Tuban は旧港を配下に置いた。Tse Tsun と Sambas はチャンパから解放され、南京政府直属の中華帝国植民地となった。Yang Yu 帝は Gan Eng Cu に地位と、黄金の帯の形をした官位の印と宮廷服を授けた。

1443 年

Gan Eng Cu は、スマランの火薬工場長の Swan Liong (Naga Berlian[8])を、非イスラム教徒の華人海賊にしばしば襲われる旧港[9]の華人イスラムの長にした。砲兵隊の勇者である Swan Liong は Cangki/Majakerta の華人であり、宮廷侍女の華人女性から生まれた。Swan Liong はマジャパヒト王の Yang Wi Se Sa の実子であると言われている。

1445 年

Bong Swi Hoo は旧港の Swan Liong に訓練のための援助を申し出た。Bong Swi Hoo はチャンパの Bong Tak Keng の孫であった。この年も Bong Swi Hoo は Swan Liong に信用されていたので、華人ムスリムの長の地位にだれかを任命するために Gan Eng Cu に逢いに出かけた。

1446 年

Bong Swi Hoo はスマランのハナフィー派華人ムスリム社会に投宿した。〈64〉

1447 年

---

7 (訳)この名に該当する皇帝はみあたらない。この時期は正統帝であった
8 (訳) 「ダイヤモンド龍」の意味
9 (訳) パレンバン

Tuban の Bong Swi Hoo が Gan Eng Cu の娘と結婚した。

1447-1451 年

Gan Eng Cu に派遣された Bong Swi Hoo は左ブランタス河(Kali Porong) の河口に位置する Jiatung/Bangil の華人ムスリムの長となった。

1448 年

Gan Eng Wan (別名 Aria Suganda)が暗殺された。Tu Ma Pan 地域はマジャパヒトから分離した。ハナフィー派の華人ムスリムたちは半世紀にわたり、ジャワ・ヒンドゥーをそのまま奉じる Tu Ma Pan の人たちに多数殺された。

1449 年

Ma Hong Fu 閣下が中国への帰路スマランに投錨した。Ma Hong Fu の妻は亡くなりマジャパヒトでイスラム式で葬られた。

1450-1475 年

中国の明王朝が瓦解したため、南洋のハナフィー派華人ムスリム社会へ明王朝の艦隊が再び訪問することはなかった。このハナフィー派華人ムスリム社会も同時に瓦解した。三保洞廟に形を変えた極めて多数のハナフィー派華人モスクは、Semarang, Ancol, Lasem などのように mimbar[10]に三保大人の像を置くようになった。

鄭和や Bong Tak Keng と Gan Eng Cu が亡くなった後、ジャワ島や旧港、Sambas でその存在感が時間と共に低下したハナフィー派華人ムスリム社会のイニシアティブを Bong Swi Hoo はやむを得ず取ることになった。〈65〉

Bong Swi Hoo は言語を中国語からジャワ語に変え、存在感が低下したハナフィー派華人ムスリムを強化するようにジャワ人たちと共に主導した。その影響がジャワ島の歴史を決めたのであった。

1451 年

ハナフィー派イスラムを奉じていたチャンパは Sing Fun An (プノンペン)出身の内

10 (訳) モスクの最も奥にある説教台

陸部の原住民である仏教徒に奪われた。Bong Swi Hoo は直ちに対抗策をとった。Bong Swi Hoo は Kali Porong 河口の Jiaotung のハナフィー派華人ムスリム社会を出たのであった。イスラム化したばかりのわずかなジャワ人の部下とともに Bong Swi Hoo は右 Brantas 川(Kali Mas)の河口近くの Ngampel にジャワ人ムスリムの社会を作った。

1451-1474 (原文では 1447)年

Ngampel の Bong Swi Hoo は強力な指導者たちと共にジャワ島北海岸とマドゥラ島にジャワイスラム社会の建設を主導した。彼が Ngampel にいる間、ハナフィー派華人ムスリムはまだ Tuban、旧港、Sambas にいて、Bong Swi Hoo に従っていた。Jiaotong で、ハナフィー派華人ムスリムのモスクも Bong Swi Hoo の死後、三保洞廟になってしまった。

1445 年

Jiaotong の町は洪水で流失して消えてしまった。ハナフィー派華人ムスリムを除き、Kali Porong 河口の交易は寂れてしまった。

1456-1474 年

旧港の Swan Liong は Jin Bun (強者)と Kin San(金山)と呼ばれる華人の宮廷侍女から生まれた二人の子供を育てた。Jin Bun はマジャパヒト王 Kung Ta Bu Mi の実子だと言われている。<66>

1474 年

Bon Swi Hoo に逢いに行く途中、Jin Bun と Kin San はスマランに投宿した。イスラムの信仰を堅持している Jin Bun はモスクの中に鄭和の像が立っているのを見て落涙した。彼がスマランに未来永劫変わらないモスクを建てられるようにとアッラーの加護を祈ったのだった。

1475 年

自分の希望により、Bong Swi Hoo は Jin Bun をスマランの東に隣接する支配者がいない地域に配置した。スマランに近い以外に、この土地は地政学的と経済学的に見て将来ジャワ島北岸航路を支配する確かに重要な位置を占めていた。この無人の

土地は Muria 山のふもとの湿地帯であったためとても肥沃であった。Jin Bun は Bong Swi Hoo から、スマランで背教したハナフィー派華人ムスリム社会の代わりに、ジャワ人ムスリムの社会を構築する命令を受けた。

Bong Swi Hoo は Kin San に、Ma Hong Fu 以降どこでも華人の側に噂の源があってはならないと、マジャパヒトの王宮に五番目の防衛線を敷くように命令した。Kin San は火薬の製造を Swan Lion で習ったことがあった。自作の爆竹を持って Cangki・モジョクルトの町を通って王宮に向かった。Kung Ta Bu Mi は爆竹を仕掛けて喜んだ。Kin San は直ちに爆竹製造者として王宮に受け入れられた。

1475-1518 年

剛腕 Jin Bun は 40 年間以上もスマランの東側に新しくできた Demak イスラム王国を支配した。

1447 年[11]

Jin Bun は Demak のイスラム軍たった 1000 騎でスマランの町を奪い、殉教を恐れない戦いの魂を得た。<67>Jin Bun は三保洞に先回りしてこの廟の上からの妨害をすべて避けた。賢明な Jin Bun はスマランで背教した元ムスリムの華人たちを殺戮しなかった。かれは、航海術分野をはじめとしてこの人たちの専門技術を必要としたからである。逆に言えば、スマランの非イスラム人たちは Demak のイスラム王国に服従する国民になることを約束した。

Jin Bun 司令官本人に率いられた Demak のイスラム軍は、スマランの南側にある Candi に既に半世紀間存在したイスラム集落の焦土作戦を行った。

Bong Swi Hoo の依頼でマジャパヒトの Kung Ta Bu Mi 王は Jin Bun を Jin Bun 王子の称号と共に昇格させ、彼を Demak に滞在する Bing Tolo 地域の太守にした。Jin Bun は王に謁見するためマジャパヒトの宮廷に行き、そこでも彼は Kung Ta Bu Mi 王の息子であると自ら述べた。Jin Bun のムスリムとしての行為は単にアッラーを礼拝したいだけであり、かつマジャパヒトの属国の太守として彼はマジャパヒト王である父を拝まなかった。

[11] (訳) 原文の誤り。 1477 年が正しい。

1478 年

Bong Swi Hoo が Ngampel で死去した。Jin Bun は時間を無駄にせず Ngampel に行ったが、Demak イスラム軍を率いてジャワ島内部の地域を奪うために出動した。一方 Bong Swi Hoo はまだヒンドゥー教を奉じていたジャワ人たちに対して武器を使う許可を生存中は出したことが全くなかった。マジャパヒトから戻って、Jin Bun は Kin San を連れて行った。マジャパヒト王国の偉大さの印としての財宝は馬七頭分ありそれを Demak に持ち帰った。Kung Ta Bu Mi は Demak で捕虜となり、Jin Bun に自分の父親として十分なる尊敬を持たれた。マジャパヒトは焦土にはならず、非イスラムのジャワ人たちが戻ってそこに住み着いた。Jin Bun の命令でスマランに新しいモスクが建てられた。〈68〉

1478-1529 年

Kin San は半世紀間 Semarang の太守の地位にあった。極めて寛容な首長ですべての人種と宗教を保護した。故 Gan Eng Cu の息子で背教した Gan Si Cang に Kin San はスマランの非イスラム華人の長になることを指示した。

Kin San は Si Cang ともに、鄭和提督によって三世代前に作られたチーク材の製材所と造船所を直ちに再建した。

1479 年

Bong Swi Hoo の一人の息子と元弟子が造船所と三保洞廟を見学した。彼らは二人とも中国語が上手ではなかった。

1481 年

造船所の職人たちの要請で、Gan Si Cang は Kin San に、スマランの非イスラム華人が好意の奉仕活動で Demak の大モスクの建設を終わらせたい意思があることを申し出た。Jin Bun はそれを許可した。

1488 年

Kung Ta Bu Mi の娘婿である Pa Bu Ta La がヒンドゥー教を奉じるマジャパヒトの太守になったが、Demak の Jin Bun に税金を払うようになった。役割が逆になったのであ

る。

1509 年

Jin Bun の息子の一人である Yat Sun はスマランの造船所へ Kin San に同行した。Yat Sun は Demak の海軍で Moa Lok Sa(マラッカ)を奪いたいと言われていたので、造船量は二倍になっていた。〈69〉

1512 年

赤い髪をして粗暴で遠距離から火器を使う人たちに奪われた Moa Lok Sa を Yat Sun は取り急ぎ攻撃した。

1513 年

Ja Tik Su という名の Ta Cih 人は船が壊れたのでスマランの造船所で修理していた。Ja Tik Su は Yat Sun とともに Kin San に Demak まで送ってもらい、そこから Ja Tik Su は二度と戻らなかった。Ja Tik Su 所有の Ta Cih 型の船は、大型だが低速の中国のジャンク船より速度を上げるための手本にされたのだった。

1517 年

Pa Bu Ta La の招きで Moa Lok Sa の南蛮人たちはマジャパヒトの人たちと交易をするためにやってきた。Jin Bun は Demak の軍隊で二回にわたりマジャパヒトを攻めた。Pa Bu Ta La の妻が Jin Bun の末妹であったというだけで Pa Bu Ta La はそのままマジャパヒトの太守とした。しかしながらマジャパヒトの町と王宮は、Jin Bun による禁止令なくして、強奪に遭い空になった。

1518 年

Jin Bun が 63 歳で死去。

1518-1521 年

Yat Sun が Demak のイスラム王として治世を敷く。

1521 年